

書 評

原田信男著

『なぜ生命は捧げられるか』

動物供犠の全容が立体的・体系的に見えてくる

前 城 直 子

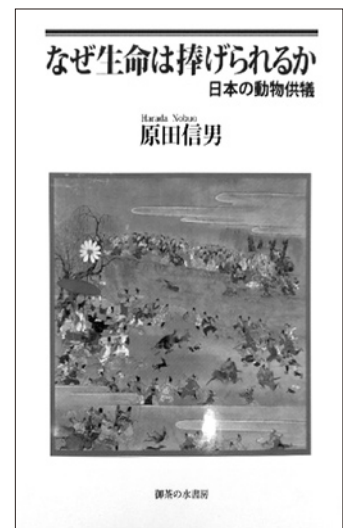
本書は、原田信男氏が四半世紀に亘ってあため続けてきた、日本の動物供犠の諸問題を体系的・総合的に整理して上梓した待望の書である。

日本の動物供犠は、水田稲作・肉食の否定という問題と不可分に展開してきた。著者は旧著『歴史のなかの米と肉』で、「聖なる米」「穢れた肉」を対立的に強調しすぎたという反省に立ち、本書では両者の共存という新たな視座からの照射を指向している。

問題点の軌道修正は、そのまま研究史の見直しにも直結する。したがって、本書の立ち位置は明確である。広く東アジア・東南アジアにも目を向け、動物供犠を農耕との関連で捉え直すという手法で展開されている。このため本書では、中国大陸と朝鮮半島の動物供犠を探り、日本の動物供犠との相対化が図られている。

本書の編成は、大きく本編「日本における動物供犠」と、付編「日本古代の動物供犠と殺生の否定」に分かたれている。本編は六章からなり、その前後に序章と終章が置かれている。

まず、序章「動物供犠の系譜―野獣と家畜」では、従来、日本の多くの研究者が、肉を嫌った日本人が動物の犠牲を行ったはずがないという誤った先入観から、見落とされてきた動物供犠を示すかすかな資料を、著者は丁寧に掘り上げていく。この視点が、日本の動物祭祀と供犠の問題で、新たな三類型の整理へと繋がっていく。それは動物供犠を体系的に見ていく作業で、その系譜は①狩猟のためのもので供犠とは呼びえない縄文的な動物祭祀、②農耕のための野獣（ブタも加える）を用いる弥生的供犠、③農耕のために牛馬を用いる大陸・半島の供犠の三類型に纏められている。著者はこの類型で日本の動物供犠を整理し直さない限り、覆いかぶさっているヴェールを取り払うことは出来ないと述べている。①・②と③の間には大きな断層があることは確実で、著者の分類はそのあたりに楔を打ち込んだものである。この三類型は、第五章においてさらに詳細に開かれていく。また、動物供犠の系譜を大きく野獣と家畜に振り分けたことは、東アジアの視座から見た日本の動物供犠の特色を、鮮明に浮かび上がらせる著者の意図が見えてくる。



ISBN978-4-275-00980-7

定価2800円＋税

2012年6月1日発売

中国大陆と朝鮮半島の動物供犠が、弥生的供犠に移入されて③の日本の動物供犠が形成された。したがって、大陸と半島の動物供犠の在り方を探ることが前提条件であるとの著者の考えが、第一章「中国大陆の動物供犠—黄河文明と長江文明」、第二章「朝鮮半島の動物供犠—大陸と列島の架け橋」となって、本書でまっ先に説き起こされていくのは、至当であろう。従来、類型③に属する牛馬の供犠は、大陸と半島に由来すると指摘されてはいたが、本格的に俎上に上げられることはなかった。本書ではさらにもう一步踏み込んで、大陸・半島・日本の動物供犠を、農耕儀礼との関連で捉えている。したがって本書は、東アジアの視座からの日本の動物供犠の歴史的 position の始まりともいえよう。

そこで第一章では、まず、日本の動物供犠の源流を中国に置いている。その理由は中国の文化・思想・技術・制度・習俗等、わが国の古代社会に計り知れない圧倒的な影響力を持っていたこと、さらに、中国ではすでに紀元前1600年ごろの殷王朝から、動物供犠が農耕儀礼と共に盛んに行われていたことを注視する。世界四大文明の一つである華北の黄河文明は、麦を中心とする畑作と牧畜を生業の基礎に据えていた。すなわち、農耕という生産様式と、家畜を飼育する飼育動物がともに紀元前のはるかな時代から行われていた。農耕の豊穰を祈って貴重な家畜を犠牲獣として捧げる動物供犠の文化がすでに成熟していたことを、文献学・考古学から追跡している。犠牲獣は殷代から、ウシ・ヒツジ・ブタというランク順も確立していた。これに対して、華南の水田稲作をベースにした長江文明は、日本文化の形成に決定的に影響した。水田農耕に不可欠な水牛が高い価値を占め、ここでも水牛がブタ・魚と共に犠牲獣として捧げられた。長江文明においても、犠牲獣はやはり飼育動物であった。すなわち、中国における動物供犠は、黄河文明・長江文明ともに農耕（豊穰）儀礼として、一貫して貴重な飼育動物が捧げられるという不可分の構図が導き出されている。

第二章の古代朝鮮半島における動物供犠については、早くから資料の少なさに悩まされ続けてきた。そこで本書では、古代朝鮮の国家祭祀を辿り、それらが祖霊祭や穀霊祭など農耕祭祀をベースにしていたことが明らかにされるが、動物供犠については明確ではないとしている。それを補う方法として著者は、古代朝鮮に関する中国側の記録資料を援用し、農耕と動物供犠の関係を導き出し、豊富とは言えないが動物供犠の存在をたぐり寄せている。その結果、古代朝鮮三国では、宗廟祭が始祖祭・穀霊祭として催行されていたので、農耕祭祀として飼育動物の供犠が行なわれていたと結論づけている。近代朝鮮における動物供犠も資料的には乏しい。しかし著者は近代朝鮮における農耕祭祀と動物供犠の密接性を剔抉して見せている。それは、日本帝国主義の朝鮮植民地時代に朝鮮総督府の囑託で詳細な民俗調査を行った村山智順の膨大な調査資料の分析である。村山が作成した動物供犠を伴う「祈雨祭」に焦点を当て、これを著者のテーマに引き寄せ、まっすぐに核心へと向かう。村山の著書に基づく一覧表には、全122例が紹介されている。そして3例の除厄儀礼を除くと、残りはすべて祈雨祭に関わるもので、そのうち動物供犠を伴った確実な事例が92例、省略されているが供犠を伴っていた可能性が高いと著者が判断したものを合わせると、実に100例を超える動物供犠の民俗事例を導き出している。祈雨祭は言うまでもなく農耕儀礼の一環である。先に、古代朝鮮の動物供犠の事例が僅少であることを見てきたが、近代朝鮮の祈雨祭に伴う動物供犠の夥しい習俗事例は一朝にして出来上がるものではない。著者はさらに、朝鮮半島における立春の

土牛儀礼・臘祭・積奠など動物供犠を伴う例も挙示している。すなわち、先行文献や中国の関係資料を発掘し、闇の中に埋もれていた朝鮮半島の動物供犠の様相が、これでやや明らかになってきたといえる。したがって、従来、朝鮮半島における動物供犠が明確でないとされてきたが、半島においても確実に受容されていたと推察することは可能で、農耕儀礼と飼育動物の供犠が不離密接に展開されていたと受け止めてよいだろう。

さて、ここで本書全体を見通して、著者の研究手法・研究態度に言及しておきたい。本書を読み進めると、読者はすぐに著者の研究態度に圧倒されることだろう。文献資料・論文資料をくまなく渉猟し、加えて考古学的知見、口承伝承、民俗資料を総動員して縦横に論じ、明らかにしようとする研究態度が全編を貫いている。文献史学の厳格な実証主義には、そぞろ頭の下がる思いがある。私たちは、その点を大いに学びたいと思う。もう一点は、著者は明言こそしてないが、日・中・韓は言うまでもなく、アジア諸国の研究者が共通のテーマを議論する時が来ていることを、提唱しているのかもしれない。本書では、東アジア・東南アジアの視点から、相対化されてきたことも多い。したがって、本書のようなテーマは、やはり国境を超えなければならない。

第三章から、いよいよ日本の動物供犠の諸問題が取り扱われていく。第三章「日本列島の動物供犠―血とオビシャ・ト骨」では、農耕の存在がほぼ疑いがないとされている縄文時代にさかのぼって、農耕と動物供犠の問題が考古学的成果を基に考察されている。第一節の「縄文・弥生の動物供犠」では、縄文早期からイルカ・シカ・イノシシの頭骨、クジラの椎骨など、動物を用いた祭祀とみなしうる事例を挙げ、これらは祭祀のためにわざわざ動物の命を奪って供犠としたものとは認めがたく、獲物の一部を神に捧げたものと見ている。縄文農耕では、農耕を目的にした動物供犠は、考古学的資料からは確認できないようである。動物供犠ではなく、動物祭祀の位置づけである。水田稲作が本格化した弥生時代になると、イノシシやブタの下顎骨の一部に孔をあけ、そこに棒や縄を通して懸架する事例が急増し、これらは積極的な動物供犠の開始と捉えている。文献的にも猪飼部が見られることから、本格的な飼育動物の存在と想定している。第二節の「シカの血と農耕儀礼」では『風土記』などの例から、シカの血を用いた農耕儀礼の存在が注目される。また、シカの血に関する民俗例もあり、決定的なものは弥生の銅鐸絵画にもシカやイノシシを射る図がある。銅鐸絵画は豊作祈願の一面もあるので、農耕のための狩猟として想定されている。農耕と血の係わりについても多様な事例があり、東南アジア・アフリカ・インドなどにも見られ、古代中国では、犠牲の血が農耕儀礼や祖霊崇拜で重要な意味を持っていたことが指摘されている。第三節の「オビシャと農耕神事」でも、餅の的とよばれる射儀がやはり『風土記』などに見られ、古くから存在していた。中国や東南アジアに分布する射日儀礼が日本に伝わり、予祝的模擬狩猟や天候の順調を祈願する農耕儀礼へと変っていった。銅鐸絵画は、射儀の一面を伝えているとも見られる。第四節の「日本におけるト骨の系譜」では、動物供犠そのものではないが、五穀豊穡や作物の豊凶儀礼を占ったりして農耕との関連性が認められると解説されている。日本では獣骨が一般的とされるが、ト骨も弥生文化と共に朝鮮半島経由で流入した。

第四章では「生贄・昨・祝―動物供犠の用語的検討」で、見出しの通り、動物祭祀と供犠に関する用語面からの詳細な検討がなされている。古辞書類に丁寧にあたり、研究史をふり返り諸説の整理

がなされ、分かりやすく具体的に示されている。生贄^{いけにえ}は、生きた贄を殺し、神に捧げるという動物供犠が、かなり古い時代から存在していたこと、肝^{ひもろぎ}は、本義は殺した野生獣の肉を神に捧げること、祝^{いはり}は、動物を殺して供えるために重要な役割を負った人物のことである。これまで本格的になされてこなかった用語面からの体系的な検討・整理を行った上で、ヤマト政権の成立以前から、日本では動物供犠が行われていたと見られるという、著者ならではの慎重かつ周到な結論が導き出され重要である。

第五章「狩猟・農耕と供犠—縄文的祭祀から弥生的供犠へ」は、すでに序論で示されていた三類型が、再び詳細に開かれたところである。日本の動物供犠は、大陸や半島のように飼育動物ではなく、基本的には野獣＝狩猟獣（シカ・イノシシ）を供するという特色を指摘する。しかし、同じ猪鹿の供犠でも、①縄文的な系譜を引く狩猟の性格の強い動物祭祀と、②弥生的な農耕の性格の動物供犠に大別して考えるべきだとしている。①については、初源的には狩猟神として信奉された日光二荒山神社・諏訪大社・阿蘇神社の事例を考察の対象としている。三神社の狩猟儀礼を基礎とした動物祭祀が、中世以降一段と強まる殺生罪惡観の社会的雰囲気の中、次第に農耕儀礼のなかに狩猟儀礼が吸収される過程を、第一節「狩猟と縄文的祭祀—日光山・諏訪・阿蘇に見る動物祭祀」で明らかにしている。第二節「農耕と弥生的供犠—風祭の系譜」では、農耕の成就を願う動物供犠の例として、文献資料と諏訪大社その他の風祭が挙げられている。しかし弥生的供犠も異様に米に集中していくなかで、やがて供犠も魚類に変わっていき、農耕のために捧げられた弥生的動物供犠も徐々に姿を消していった経緯を追究している。水田稲作を社会的生産の基盤に据えた古代律令国家が、異様なまでに「聖なる米」にこだわり、その結果、四足獣が極端に排除されていく過程は、著者の知識がもっとも豊富な分野であり、したがって説得力も強い。第三節の「縄文的祭祀から弥生的供犠へ—諏訪と阿蘇」も、狩猟から農耕儀礼へと傾斜を強め、供物も米や餅類へと変っていく過程が論じられている。しかし第四章「野獣供犠の伝統—猪鹿の供犠」では、著しく動物供犠が減少・衰退するなかで、日本の動物供犠の特色である野獣供犠の伝統が、そう簡単には消滅しなかったことを述べている。土着信仰の生命力の図太さを引き出し、さまざまな感懷を抱かせる。

第六章「農耕と家畜の供犠—大陸・半島的供犠の移入」では、中国に淵源を持ち、朝鮮半島に伝わりやがて古代日本に伝来した大陸・半島的供犠を全面的に取り扱っている。弥生時代に本格化した水田稲作は、牛馬の移入により、供犠の様相も一変する。それまで古代日本では野獣の供犠が主流だったが、やがて牛馬を用いた供犠が行われるようになった。日本における牛馬の供犠の正確な認識の必要性から、著者はまず考古学の成果を受けて、第一節「牛馬の移入と供犠—考古学の成果」で、牛馬の供犠儀礼を実に詳細に紹介している。ウマが「威信財」として殉死に捧げられることもあったが、牛馬が農耕儀礼と密接に係わり、村落レベルにまで浸透していた事実を明らかにしている。第二節「供犠における野獣と家畜—『古語拾遺』の新解釈」では、これまで解釈に諸説が入り乱れていた『古語拾遺』の御歳神とウシの供犠の問題に新たな解釈を示している。従来、ほとんどの研究者がこの神話を殺牛儀礼とみなしてきたが、著者はここを神話の内容のみで解釈するのは片手落ちで、動物供犠の全体像からの視点が必要であるとしている。著者はこれをよく分析すれば、殺牛儀礼だとする論拠は存在せず、神話の最後に記されている、御歳神の祭儀には、白猪・白馬・白

鶏が捧げられるべきだとする祭祀の起源譚がもっとも重要であるとする。御歳神がウシの供犠を認めず、したがってウシの肉の占有権を主張するものでもない。そして、『古語拾遺』と『延喜式』とでは、捧げられる動物、すなわち、白猪・白馬・白鶏の順番が異なる点にも、両書の成立期の問題も勘案して前書が「白猪」を、後書が「白馬」を冒頭に置いていることも当然だとしている。したがって、第五章で詳述されていたように、日本における農耕と野獣供犠の伝統からすれば、御歳神社では弥生的伝統の供犠を引き、野獣であるイノシシを捧げることが本義であったとしている。そしてこの問題と背中合わせに取り上げられることとして、公的記録に動物供犠がほとんど見られないとする研究者への反論が示される。極端な水田稲作志向により天武4（675）の殺生禁断令によって、はじめは家畜、やがては野獣の供犠をも忌避していった過程からすれば、表面上は消え失せてしまうことは国家的建前からすれば当然であるとする著者の主張には、まず、意表を衝かれ、あらためて再考を促される。著者の手にかかる、かたくなに閉ざしていた扉が、思いがけないところから開かれて、長い間、闇の中に放置されていたことに、新たな光源が当てられ、次第に闇が払われていく。特に本節のテーマはこれまで百家争鳴で、今後大きな論議を呼ぶことは必定である。本節では、重要な問題提起がいくつもなされている。次第に大陸・半島の供犠が比重を高めつつあることを示しているのが第二節だと見れば、古代律令国家の殺生禁断令の行き着く先は、第三節「大陸・半島の供犠の否定―漢神の祭りとその禁令」となるのは当然であろう。移入された牛馬は、古代日本のあらゆる人々を魅了したであろう事は、たやすく想像される。農耕役畜としてこれに勝るものはなく、食用としても同様で、しかも人間になじみやすく飼育することも容易である。供犠が至上の価値を持つ牛馬に取って代わっていく様相はきわめて道理である。皇極紀元年の記事や各地の百姓が盛んに漢神に牛馬を捧げていたことも、このことを示すものであろう。しかし古代国家がついに国家権力によって牛馬の供犠の禁止に乗り出していく過程を著者は明らかにしていく。それは、牛馬が、動力的役割を担う有用動物であることと、国家鎮護の柱となった仏教の殺生戒が農耕のためには重要であるという古代国家の価値観が形成されたことが理由と見ている。ところが本書では、埋もれていた資料も新たに掘り上げながら、旱天など、農耕の非常事態の際には、動物供犠を容認あるいは推奨したという興味深い、矛盾した国家の一面をあらわに抉り出して明らかにして見せる。しかし、この後も古代国家は政策的には動物供犠の禁止を推進していくが、第四節「家畜供犠の伝統―さまざまな牛馬の供犠」で展開されているように、そうたやすく一掃することは出来なかった。第四節では、幾多におよぶ厳しい禁令にもかかわらず、700年以上経た中世戦国期に、家畜供犠の雨乞い儀礼が行われた記事が著者の目に留まる。どうしても雨が降らない場合は、滝壺にシカの骨か頭など、不浄のものを投げ入れれば必ず雨が降るというものであった。ここからが村落史研究家の著者の面目躍如たるところとなる。近世以降、村落レベルで文字使用が盛んで各地に資料が保存されるようになっていくことを知っている著者は、近世・近代の地誌や日記類などの記録・民俗伝承・新聞記事などで、雨乞いのための牛馬供犠の事例を徹底的に調査し、実に40例も確認するという大きな作業を成し遂げている。それが本書の表2となって纏められた。表2は、供犠研究を一步も二歩も進める労作である。表2から著者は、①牛馬供犠は全国的分布であること ②700年を経て牛馬が穢れたものだから供犠とされるという「穢れ観」に変っていることなど、貴重

な見解がいくつも示されている。本書は全編がそうであるが、特に本節では、人の捨てて一顧だにしない、一見、瑣末な資料にも新しい光源から照射しこれに卓抜な解釈を加え、供犠研究の隘路を開いている。豁然と目の前が開ける思いを抱くのは、一人二人ではあるまい。

終章は「総括と展望―人身御供・人柱と首狩り」となっている。第一節「日本における動物供犠の変遷と意義」では、中国・朝鮮半島・日本の動物供犠のまとめとなっている。第二節「供犠の理論をめぐって」では、広く世界に目を転じ、文化人類学の錚々たる大家の主要な理論の紹介・解説がなされている。第三節「人身御供・人柱と首狩りが語るもの」では、神への祈願の最大の捧げものは、人間の生命である。世界各地の人身御供の伝承は、誰でもよく知っている。日本にも果たしてそのようなことがあったのか。著者は民俗学における議論を辿り、各地に残っている多くの伝承等などからも、長い歴史過程では農耕や戦争のために人身御供や人柱がありえたであろうとしている。この問題についての、柳田国男の揺れ動く姿が興味深い。

さて、長くなったが、以上が本編の内容である。恐らく著者は筆を運びながら、目の前に立ちはだかる峻厳な山並みに、何度も崩れ折れたに違いない。しかし著者の真摯な研究態度は、いくつもの峻厳な山並みを登攀し、ついにこれまで誰もなし得なかった日本の動物供犠の全容を、東アジアの視点を取り込んで相対化した。この視点は、次の段階で日本の動物供犠を野獣と家畜に分ける作業に繋がり、そこからさらに三類型の整理へと進む。そして時系列で、日本の動物供犠の全体像を見通していく。日本の動物供犠の全容が、立体的かつ体系的に見えてくる構図である。

いくつか疑問点を提示したい。天武4年の殺生禁断令は、以後の動物供犠の強大な禁圧の先蹤となった。鎮護国家の柱とされた仏教の殺生戒が古代国家の国是であったならば、なぜ、すべての生類の殺生を禁じなかったのか。「牛・馬・鳥類・犬」、後に「猿」が加えられるが、なぜこの五種なのか。稲作農耕の保護と、これらの動物との関係はどのようなものか。さらにこのなかで馬と猿が肥大し、著者もこのことを問題にしている。近世・近代の民俗で正月の春駒、歌舞伎の三番叟が駒を引く場面、厩屋祈祷の猿回しなど、馬と猿の負う意味は大きい。近代に至るまで、雨乞いにはほとんどこの五種の動物が変わることなく捧げられている。これらの動物を持ち出している天武の指導原理は何か。あらためて虚心に問い直されなければならない。

本書はたいへんな労作で投げかけている課題も大きい。現在における動物供犠の到達点を示すものである。評者はこの仕事をお引き受けして、何度も後悔した。資料を博搜し、精緻な分析を展開している本書の書評など、矮小化以外に何もない。その点は著者にお許しいただきたい。

日本の動物供犠に関心のある方々にぜひ、本書のご一読をお薦めしたい。本書は不壊の書である。

追記：付編については枚数の関係上言及できなかった。既発表の論考に、本書所収に際して新たに増補訂正されたいずれも動物供犠をテーマとするものである。これもご一読をお薦めしたい。

また本書には姉妹編として『捧げられる生命―沖縄の動物供犠』（原田信男・宮平盛晃・前城直子の共著）がある。併読をお願いできれば幸いである。